

38. やませ

もう一度梅雨に戻りまして、オホーツク海高気圧 に関するある一面の話です。梅雨は六月中旬頃沖縄諸島に始まり、その範囲は北上して本州北端まできますが、北海道は梅雨の範囲には入りません。それはオホーツク海高気圧が張り出して北海道全域を覆うからです。ただし例外はあって北海道が梅雨に入ることがありますが、これを‘蝦夷梅雨’といって期間はそれほど長くはありません。

このオホーツク海高気圧は上層が切り離し高気圧で温暖ですが、下層は海水温度が極端に冷たいため接する大気が冷却して出来る寒冷高気圧ですから、温暖と寒冷の両気圧の二重重ねの構造です。

高気圧ですから風は時計回りで吹き出し、下層の冷却高気圧からの吹き出しですから当然冷たい風になります。ただしこの風は毎年一律に吹くわけではなく、高気圧の中心位置とか親潮の状況とかによって異なります。

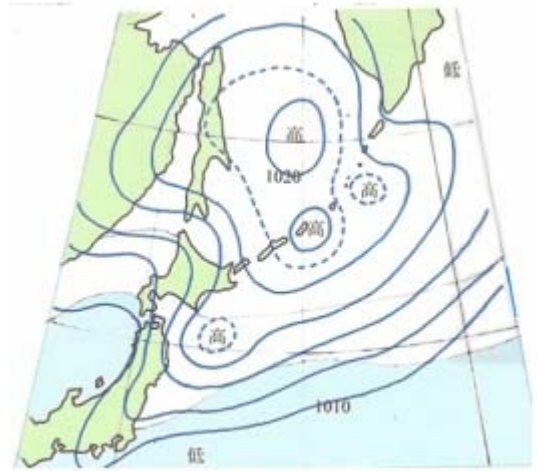
希に北海道、東北、関東の太平洋岸から内陸にかけて6月～8月頃にかけて北東の冷たく湿った風が吹くことがあり、この風が吹くと冷害になることが多いのです。この風を‘やませ’といい、オホーツク海高気圧から吹き出した風が、更に三陸沖の親潮で冷やされ、湿った冷たい風となって、霧と冷気運び冷害をもたらすもので、冷害風や餓死風などと呼ばれ水田耕作農民にとっては死活問題だったのです。

やませが吹く時季は6～8月ですから、田植え、水稻の成長期から出穂、開花期という大切な時季で、高温・日照が必要なときにやませが吹くと一つ挙に温度が4°～5°下がり、霧がかかるので日照も不足し、この様な状態が7日以上続くと冷害となり、水稻は青立ち状態となり実は結ばず、大きな被害を受けることになります。

‘やませ’とは漢字で‘山背’と書きますが、これは当て字で、本来は北東の風を意味します。この原因はオホーツク海高気圧が例年より大きくて、北太平洋高気圧がなかなか北上出来ない状況にあると、全国的に冷夏になる全国冷夏型と北日本は冷夏で西日本は暑い夏になる北冷西暑型とがありますが、北冷西暑型が多く、この時は沖縄は高気圧圏内に入り干ばつになります。

米作が基幹産業であった我が国にとって冷害による被害は大きく影響し歴史を変えたと言われるくらいの大事件が何度も起きています。

江戸時代の三大冷害は享保、天明、天保が挙げられ、東北地方の冷夏による大凶作、関東地方は浅間山の大噴火による噴煙と降灰によって関東地方は農作物が全滅、大飢饉になった‘天明の大飢饉’は年表にも記載されている大事件でした。



(やませ発生の気象図)

1783年 天明3年第十代将軍家治時代で田沼意次が権勢を振るっていた時代‘天明の打ち壊し’はこの時起きた事件でさしもの田沼意次も失脚し、次いで老中になった松平定信の‘寛政の改革’によって辛うじて治めております。この時の冷害による飢饉では我が国の総人口が初めてマイナスになったくらい餓死者が多かったのです。

明治以降も日露戦争が戦われた明治38年にも冷害があり、戦争のため働き手である青年壮年が戦争に駆り出され、労農を老人や女子の手に委ねられたためより深刻な打撃を受けたのです。さらに関東大震災による後遺症として経済不況に悩まされ、その落ち込みが回復しない昭和のはじめに東北地方を大冷害が襲い、その当時の我が国は軍備増強に狂奔しておりましたが、未だ国民の8割は農民であった農業国家だったのです。しかし狭い国土に零細な農業であれば長男以外は後継者になれず、次男、三男は軍人になるか工場労働者になるかでしたが、昭和4年(1929)10月24日ニューヨーク証券取引所での株価大暴落をきっかけに金融恐慌を引き起こし、世界的な大不況に陥ったのです。よく「アメリカがクシャミをすると、ヨーロッパが風邪を引き、日本は肺炎になる」と言われておりますが、この時はいずれも重体に陥った経済恐慌でした。近年のリーマンショックは百年に一度の経済不況だと言われておりますが、この昭和初期の経済恐慌、農村恐慌、或いは第二次大戦後の社会的、経済的全てがハチャメチャの大混乱時と比較して何を根拠に百年に一度の大不況だと喚んでいるのでしょうか。

金融恐慌を引き起こした当時のアメリカは、第一次大戦で戦勝国となり、しかも本国は戦禍の痕は全くなく、経済は躍進し我が世の春を謳歌していたのです。そこへもの凄い経済恐慌がやってきて、失業者が満ち溢れ一挙に奈落の底へ突き落とされたのです。フーヴァー大統領の失業対策事業としてテネシー川総合開発やダム建設等で手を尽くしますが、あまり成果はなく、次のフランクリン・ルーズベルト大統領へ換わります。

最も速く回復したのはスターリンのソ連邦ですが、これは社会体制が異なりましたから単純に比較は出来ません。ヨーロッパではイタリアのムッソリーのファシスト党が政権を握り、ドイツではナチス党が第一党となってヒットラーの独裁が始まります。賢明であるはずのドイツやイタリアの国民が熱狂して、これらの政党を支持したのはどうしてでしょうか。第一次大戦で敗戦国となったドイツは莫大な戦時賠償を求められ、経済は破綻、超インフレに悩まされ、共産革命寸前までいったとき、突如現れた正義の騎士ならぬヒットラーが率いるナチス党ですが、やることは無茶であっても経済を立て直し、国民を苦しめてきたヴェルサイユ条約の破棄、失われた領土の回復と矢継ぎ早の働きに、その後に来るであろう破滅への路までは見えず、国民の支持は一つ挙に盛り上がったのです。同



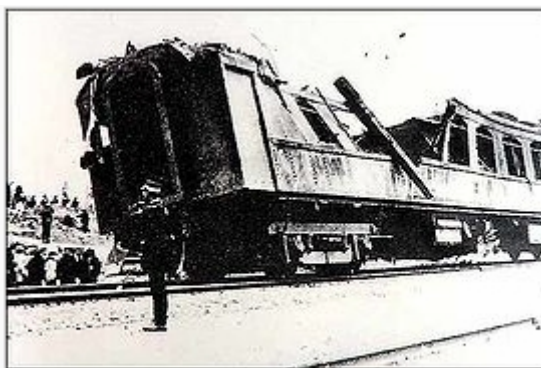
様にイタリア国民もムッソリーニのファシスト党の働きを歓迎し経済は躍進していきました。

イギリス・フランスは戦勝国であり、膨大な植民地を支配していたのでこれらを緩衝材として不況をのりきろうとしていたために独・伊よりはやや消極的で後塵を拝することになってしまいました。

一方、我が国は金融恐慌に加えて、やませによる天候不順、稲の青立ちによる農村恐慌が重なり、娘を売らなければどうしようもない窮地に追い込まれ、東北地方は女衞の横行に悩まされたのです。この頃芽生えた恐慌打開策は軍部の「満蒙は我が国の生命線である」という身勝手な発想です。即ち満州と内蒙古に親日傀儡政権を樹立させ植民地政策を強行することによって経済恐慌の難局を乗り越えようとするムシのいい発想です。

「修身齐家治国平天下」 儒教の経書 王道国家 天下を治めるには、まず自分の身を修め、次に家庭を平和にし、次に国を治め、その次に天下を治める。という誠に立派な教えで軍人達が信奉するのは良いのですが、その解釈が拡大してしまうのです。

利己主義な欧米を戦争で淘汰できるのは我が国だけである、何故なら我が国は王道主義だからである。虐げられた植民地の民族や弱小国家は解放を待ち望んでいる。そのためにも戦争準備しなければならない、とエリート軍人達は自らの路を決めたのです。



(張作霖爆殺事件)

経済恐慌で国民が喘いでいる時、軍人達の発想は戦争を手段として国民生活の安寧を願い、経済を立て直そうというズレた感覚で暴走しだすのです。そしてその軍の

暴走をくい止めることが出来なかったのは欽定憲法の欠陥です。即ち軍に命令できるのは奉勅令のみ、陸軍は参謀総長、海軍は軍令部総長が指揮権者、天皇は建前として命令権者ですが拒否権はなし認可するだけ、内閣・行政・議会も命令権なし、これでは暴走をくい止める術は最初から無いに等しい制度でした。

後日、東京裁判では満州事変から敗戦時までの 15 年を対象としていましたが、私見としては、軍暴走の始まりは、関東大震災の直後である大正 12 年（1923）9 月 16 日 憲兵甘粕雅彦大尉（仙台市出身）がアナキストの大杉栄・伊藤野枝・甥の 7 才の男の子を絞殺し古井戸へ投げ込むという事件がありました。軍人の裁判は陸軍刑法による軍事法廷で関係者は全て軍人ですから、短い刑期の後、軍の機密費でフランス留学、その後は満州で謀略の数々に携わっておりますから、軍人は正義のための行動であれば許される、という思想がこの辺から蔓延するようになったと解釈しております。

続いて昭和 3 年（1928）6 月 4 日 中国北東部の京奉線瀋陽駅の手前を進行中の特別列車が爆破された「張作霖爆殺事件」は関東軍高級参謀河本大作大佐（兵庫県）の仕組んだ謀略です。この時も関東軍は国民政府のゲリラの仕業と宣伝しましたが、自作自演の謀略が明るみに出てしまい、首謀者河本大佐の予備役編入だけで、その後は南満鉄理事、満州炭坑理事ですから、文字通り天下りの典型、この辺から軍の行動は邪道に入ります。

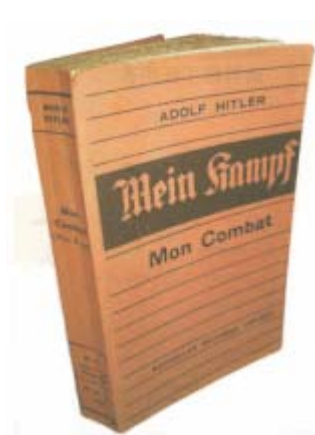
決定的な暴走は、昭和6年（1931）9月16日 柳条湖事件、満州奉天（現瀋陽）郊外の南満州鉄道の一部が爆破された事件で、ゲリラの犯行だと判断した関東軍は即座に出兵、続いてあちこちで爆弾による爆破が連続し、張軍団との全面对決となるのです。しかしこの謀略は関東軍特務機関土肥原少将（当時）に下命された前述の甘粕機関の工作によるもので、その指導は関東軍高級参謀石原莞爾中佐（当時）、それを補佐したのが板垣征四郎大佐（当時）、関東軍司令官本庄大将の許可無しで行われた策戦軍事行動ですから当然奉勅令に反し、軍事裁判では銃殺刑もしかりですが、これが見事に成功し、張軍団を駆逐し全満州を占領してしまいましたから、結果良けれ全て良し、と参謀本部も追従して令を出し、満州国建設、大陸進出の野望は少しずつ達していくのです。

この原動力となったのが石原中佐は山形県鶴岡市出身、板垣大佐は盛岡市出身、共に東北の出で、東北農村の悲惨さを身をもってに体験しており、この当時の徴兵は郷土連隊入隊が原則ですから部下に多くの東北出の兵士がおり農村の悲惨さ理解し、解決法を模索していたのだと思います。

この作戦行動は、後に「満州事変」と命名され、この事変に動員されたのが、当時関東軍の中核であった第二師団（仙台市）の若松連隊で、福島健児が満州の荒野を駆け巡っております。この連隊はノモハン事変、太平洋戦争ではガダルカナル島の攻防戦で一部がヘンダーソン飛行場に突入、最期まで陣地を死守しており、転身後はインパール作戦に投入され、最悪の戦場ばかり動員された悲劇の連隊といえます。

かくして満州事変を策戦指導した石原中佐、板垣大佐は英雄となってしまうのです。

その後は5.15事件、2.26事件、日支事変、ノモハン事変、太平洋戦争へと破滅への路をまっしぐらに突き進みましたが、最大の原因は満州事変を契機として欧米との対立激化、国際連盟の脱退、日独伊三国同盟への加入、ABCDラインの経済封鎖の恐怖、と予想もしなかった連鎖反応に対応できな



かった軍人達の焦り、軍人としては有能であっても、未知な国際問題には対処出来る能力が無いにも係わらず政治の中枢を握ってしまった悲劇です。そして全く参戦する必要がなかった太平洋戦争を自ら引き起こした過ちは、ヒトラーへの過信です。ヒトラーが獄中で書いたといわれる「我が闘争」(Mein Kampf) (マインカッフ、独逸語)の日本語版が軍人達の愛読書になります。ところがこの原書の方は有色人種はこの世から排除すべき、とかアジア蔑視が多く書かれておりましたが、日本人受けする都合のいい部分だけの翻訳物ですから、日本軍部が陥っているシナ事変のアリ地獄からの脱出はヒトラーと手を組むことによって解決出来ると思ってしまう

のです。一方、原書で読んだ人達はヒトラーの危険性を見抜いており、これが陸軍と海軍の対立の原点になりました。

結局は、この1冊の本が第二次世界大戦を誘発してしまったのかもしれない。

ともかく昭和初期から続くヤマセによる不作が農村恐慌に発展、更に金融恐慌、米国発進の経済恐慌と相俟って不況に喘ぐ国民はその突破口を軍国主義に託したのも世の流れかもしれません。日独伊

三国の国民は集団催眠のように一方向への流れに乗ってしまうのです。

これと全く反対の事象でも我が民族は再び過ちを犯しました。それは第二次大戦で全てを失い、無から出発した我が国民は死にものぐるいで働き、やがて世界第二位の経済大国に成長した時、思いもかけない深刻な事態がおこりました。十分すぎるほどの外貨準備高、昭和 50 年代後半 1980 年代に日経平均最高値空前の 3 万 8915 円 87 銭、強気の証券界は 4 万 5 千円までは絶対大丈夫と超強気の姿勢、株を買いまくり、不動産に投資し、果ては絵画まで手を出す、見境のない投資に狂ったのです。

その頃、私は好況の恩恵を全く受けることなく、ニューヨークのオウール街の外れの古ぼけたビルの事務所でユダヤ系のボスに怒鳴られながら働いておりました。そこへ日本人の一団がマンハッタンのビルを買いにやってきて、ビルのオーナーはユダヤ系が多いので、ボスに通訳の手伝いに行けと命ぜられ、また大学の同窓会紐育支部があつて銀行や商社の紐育支店で働く同窓生が多数おり、その中でユダヤ人の会社で働く唯一人の落ちこぼれ同窓生であった私は利用し易かったのでしょう、取引現場に立ち会わされ、投資者とオーナーから依頼された弁護士との通訳をやっておりました。その時、日本側の鷹揚さに仰天、オーナーの言い値で即金払い、私はビルを手放してしまつて惜しくないのかと、ソオーッとユダヤ人のオーナーに尋ねました。ニヤツとして答えるには 7 年以内に日本人は半値以下でこのビルを手放すだろう。そうしたら更に値切って売値の 30%位で買い戻すからいいのだと自信たっぷりに言っておりました。そして 5 年後バブル崩壊、3 割以下で手放してションボリと日本へ帰っていきました。

世界の金融を牛耳るユダヤ系の凄さ、国を失つても 2000 年、頑張り通したしたたかさを近くで視ることが出来たのは学ぶことが多く幸運でした。

バブル期日本全体が夢見すぎたのか、好況の天井を読めなかった或いは土地神話を信じすぎた経済専門家、投資家、その他バブルに踊り狂った紳士達、矢張り集団催眠の落とし穴なのでしょう。

金融という国家の骨幹には最優秀な経済のスペシャリストがいたと思いますが、政界、財界、金融機関がブレーキが全く効かず暴走したのは、戦前の一部軍人が暴走したのと同じ現象なのでしょう。雪崩のように一部が動き出すとそれに連動してとてつもない力が働いてしまうのでしょうか。

もう一つ例を挙げると、豊臣秀吉を考えてみましょう。名もなき最下層の農民の小倅が、営々と努力を重ね全国を統一、その頂点に立ったとき、次にやるべきことの選択の誤りです。それまでは戦いに勝って領地を拓けるといふ手法で成長したわけですが、全国を平定したとき、次にやるべきは、手法の転換、事業の多角化をやるべきなのに、依然と同じ手法である内地が駄目なら、外国（二度の朝鮮出兵）があるさと余りにも安易な発想に走り、結局豊臣家滅亡はここから始まり、没後僅か 17 年で完全に消滅しております。



ともかくバブル崩壊後の後遺症は凄まじく、戦後は経済復興という目標に向かって国民が一丸となりましたが、現在はどうか対処して良いのか暗中模索状態、国家予算 92

兆 半分以上は国債で賄う異常さでも毎年のこととなると国民も麻痺してしまっ
て世界一の借金大国、返済の見込み全くなくて債務は増えるばかり、米国の財政赤字は巨大な戦費の負担ですが、我が国は何十年も戦争のケケラもなし、しかも軍事費は最低限の軽装備、これで財政赤字が十何年も続くとは、失政に次ぐ失政でしょう。一千兆の大台も目前の我が国の行くえはどうなるのでしょうか。平成 21 年兜町の大納会、終値 1 万 0546 円 38 銭。